

うやうたけて、いかでか御まうけなくてあらんといひければ、殿わらはせ給て、たゞせめよなどおほせられけるほどに、いへのつかさなるあきまさといひて、光俊、有重などいふ學生の親なりし男、けしききこえければ、修理のかみたちいで、かへりまいりて、あるじして、きこしめさすべきやうはべらざる也。御だいなどのあたらしきも、かく御らんする、山のあなたのくらにをきこめて侍れば、びんなくとりいづべきやうはべらす、あらはにはべるは、みな人のもちひたるよし申ければ、なにのは、かりかあらん、たゞとりいだせとおほせられければ、さはとてたちいで、とりいだされけるに、色々のかりさうぞくゑたる伏みさぶらひ十人、いろ／＼のおこめにいひしらぬそめませしたる、かたびらく、りかけとぢなどしたるさうし十人ひきつれて、くらのかぎもちたるをのこ、さきにたちてわたるほどに、ゆきにはへて、わざとかねてゑたるやうなりけり、さきにあとふみつけたるを、ゑりにつゝきたるをとこをんな、おなじあをふみてゆきけり、かへさには御だい、たかつき、ゑろがねのてうしなど、ひとつづ、さげてもちたるは、このたびはゑりにたちてかへりぬ、かゝるほどに、かんだちめ殿上人、藏人所の家司、職事御隨身など、さまざまにまいりこみたりけるに、このさとかのさと、所々にいひしらぬそなへども、めもあやなりけり、もろのぶ、いかにかくはにはかにせられ侍ぞ、かねて夢などみ侍けるかなど、たはぶれ申ければ、俊綱の君は、いかでかゝる山ざとに、かやうのこと侍らん、よういなくては侍べきなどぞ申されける。

〔續世繼小四

小野の御幸〕三君

藤原教通女歡子

は後冷泉院の女御にまいりて、ささきにたち給て、皇后宮と申

きのちに皇太后宮にありて、承保元年の秋、みぐしおろし給て、き猶きささきの位にて、ひえの山

のふもとをのといふさとにこもりゐさせ給て、みやこのほかに、をこなひすまし給へりき、雪おもしろくつもりたるあしたに、白河院にみゆきなどもやあらんと思て、ある殿上人、馬ひかせて